# 町村新報

發行日 毎月二回十五日卅日
編輯兼印刷發行人 酒井秀吉
發行所 福島縣石城郡磐崎村大字下湯長谷勝善三十八番地 町村新報社
定價 一部金十錢 一ケ月金二拾錢
廣告料 五號活字十二字詰 一行金二十錢 別色刷 四十錢

## ▲時事漫語▼

◆

嚢に注意し警告した、フーバア景氣は、槿花一朝の夢と過ぎた、一の唇氣樓として消えたではないか、實勢力の併はぬ空元氣はすぐに煙雲の如く跡型もなくなる一時の附景氣は將來を過まる事が多い、糠喜びに終つた事を考へると、一層物の哀れさ淋しさが、染々と身に泌みる、秋風の吹く時も近い、吾人は飽く迄堅實に足を踏みしめて一歩々々前進せねばならない。

◆

吾人の多くは、景氣の週期的循環を信ずる、現今の資本主義的經濟界に於ける、これは一の法則といつてもよい、大正九年の株式の暴落から十二年の震災と、世は漸々暗くなり、沈み喘く樣になつた、而かも社會の者が十年一周として近く好景氣の再來を夢見て居る、今年こそ來年こそと、あてのない事をあてにして、之を樂しみに又之を確實値のあるものとして信じて居るが、歐州戰亂后に於ける好況時代は、空前にして絶後のものたるを考へねばならない、今の如く世界が全体秩序的に而かも、遠近の別なく交通開け、需要供給の道に、大した變化を見る事が出來ない以上、物資に著しい變動のない限り、假需要の起らぬ限り、到底往年の景氣は來よう筈はない、今后は只、平凡なる經濟界に平凡な波のうねりを見る丈の事である、徒らに昔の夢を追つて居たら飛んだ待呆けを喰はされる事を、覺悟しなければならない。

◆

世の中の事、自然と程がある、いくら大景氣は來ぬ迄も何時迄も今の不況は續かない、近くドン底をつく時は來る、否今や正に其所に希望の曉光を認める事は、强い不合理の心狀ではない今や世界否人生は經濟の一点に歸する事になる、靈肉一致を叫ぶ者あるも、人間は肉に支配される事が多い神になり得ない、佛になり得ない、生ある限りは、人間である、如何なる人も凡夫の淺間しさである、境遇によつて心持の變る事は誰しも認める處である、世の政治家、宗敎家、敎育家の大に考へねばならぬ事である。

◆

國民に安住の地を與へ、衣食足るべき施設をせねばならない政府があり、役人があり、軍人があり、皆々國民に幸福を與へる事が第一義として出來て居る筈である、然るに今は、却つて國民の苦しむ樣な事に斗りなつてゐる、國民に臥薪嘗炭を强える、治者は温衣飽食を貪つて居る、人間は母の体肉に胎兒となれば、之を人間と見る、人間たる以上之を自分の自由には出來ない、自分の身体の一部分であり乍ら、一の獨立体である、況んや、世の中に生れ來た以上、如何に不具な嬰兒であらうとも、人格を認められて居る、飽く迄天壽を完ふせしめる義務がある保護を必要とする、然るに職がない、食がなくなる、餓死する事を社會施設の罪としない、殺人罪を罰する食ひぬ人間は省みない、敎育が惡いといふ、敎育を受けぬ人間は食はず居るも仕方がないのか、敎育が惡いからと實用向の人間が出來ないと云ふ、然し考へて見るがよい、生れた人間全部が實用的の敎育を受けたとして、現今の狀態で皆が失業せずに食つて行けるか、實用向の敎育が又實地的でない敎育と漸次に順繰りに變つて行く事になるのだ、最低階級の人間を基本にする爲政をせぬ限り世は救はれぬ事になる、其最低の人間がどれ位にするかは之亦識者の爲政者のなす手腕と頭腦によつて基着点がきまる其方法手段は種々雜多の方面に響きがある譯になる

◆

全國の模範市町村を、よく調べたら、面白い現況が生れて來るだらう、市の模範といふは先づない樣である色々な施設〳〵に就ては代表的のものもあるだらうが全般的に自治体の模範とするに足るものはない、市税の負擔に兵古垂れてゐる、背負ひ切れぬ債務に、手も足も出ぬ處がある、町にも少ない、村に最も模範的なのが多い、こゝが大に考へぬばならぬ處だ、市や町の偉い人の多い、諸設備の整頓した處が必ずしも幸福な市民町民でない、平和な衣食住の安心さは、村落に多い、之も比較的小さい處に多い、余り偉い人のない村落に多い、船頭の多い村は先づ駄目である、寧ろ專制的位な獨斷的に村政を公平に熱心にやつて行く處によい處が多い、ムッソリニー式がよい、議論や理論や体裁や斗りで自治の眞髓を發揮する事は出來ない、偉らい學問のある人間の多い處は却つて物の纒りが六ケ敷くなる、判らぬ者を敎えるより判斷の違つて居る理窟屋を說く事が厄介である。

◎ ◎ ◎ ◎

## 筆戰句鬪

靜風

### 文化の最後

しかし柔弱淫靡な希臘の文學が西の羅馬に入つた、四方金銀球玉の富は羅馬に集つた。

羅馬の市民は其の文學に醉ひ其の富に誇つていつしか輕兆浮華の民と化した。

彼等は勞働を厭うて贅澤三味を盡した、贅澤の極は七面鳥の肉や卵では足らなかつた多くの孔雀の舌尾まで賞味した、そして滅亡したのである。

### 人と魚

昔から魚は清水に棲ますと云ふ、魚だから棲まぬのだ人間は須く清水をくむべきだ。

### 甘味甘言

甘味の食必ずしも身肉を養ふものではない、甘言愛語必ず精神を修むるものではない。

### 敵

友人と云ふものは互に誠實呼はりをする。

然し本當の誠實なのは敵である、我等は自分の敵の非難を苦味の良藥として之によつて自分に關する正當な知識を得るやうにせなければならない。

### 笑

人に對してよく笑ひよく語るものは必ず人に求むる所のある證據である、腹を抱へて笑つたの轉りかへつて笑つたのと云ふ者に一人だつて歡笑してゐる者はない

## 恐るべき此の眞相

## 『欺す男と欺される女』

弱き者よ汝の名は女なりー之日本古來の德義に礎はれた悲しむべき宣告であつた然して弱きが故に愛せられ愛せらるゝが故に束縛があつた、それは獨り人間に限ず何時の世、如何なるものにも亦、愛せらるゝものは常に弱きに存してゐた。

即ち多くの人に愛せらるゝ草花は手折られて花瓶にさゝれ、小鳥は籠に飼はれなければならなかつた、

强きは敬ひ、弱きは愛せ、それは至極結構な事だが其處には必ず大きな矛盾が伴つた。

そして此の兩者の加速度が甚だしくなるにつけ、弱きもの愛せらるゝものに悲哀が生れ、煩悶が出來、蕉憂がともなつた、そしてそれが何時か强きものに對する一つの反撥ともなつて現はれて來た。

それは水の水平を保たんとする事と同じ同理で何の不思議もない事である。

けれども一方他から愛し得られない男性の强暴に趣くも亦自然の勢ひである。

故に之がレベルをとるには女に對しては男を愛せ、男に對しては女を敬ひと云ふ所にまで持ち代へなければならない『欺す男と欺される女』それは誰もが惡いのではない、此の不均衡が生せた自然の結果である。

ゆえに向後に處すべき男女にして女が男を愛し、男が女を敬ふならば、斯した社會の情弊は自然消滅する理由である。

かつてエデンの園に放れた性の噴水は、今や力强い人間生活の潛流となつて一は發して藝術を培ふ清泉となり、一は澱んで地獄の穴に惡の華を育つる濁水となつた。

遠く希臘羅馬の文明沒落史を飜くまでもなく、兩性問題の破綻は今や現代人を悍馬に乘せて、滅亡の街へと邁進して居る。そうして之を發かんとする宗敎倫理は余りに無力であり又人間性に隱れて變態へと趨く新思想は余りに人心を飜弄してゐる。

筆者は學者でない、即ち論理の矛盾を見逃して實行を呼けべばよい、ゆえに實際問題に從つて之に善處すればよいのである、本紙に現はるゝ戰慄すべき人間暗黑の一大裏面史それは何を語り何を敎ふるものであらう筆者は只事實そのまゝ記述し、後は眼光紙背に通る讀者諸氏の容易な判斷に訴へる事にし、敢てくどい解說は拔く事にした。

（以下次號）

湯本驛前
丸正運送店
電話二十一番

株式會社甲子堂
製袋部一同
印刷部一同